

まなざしの「古層」と「深層」

清末訪日中国知識人の対日観を中心に

戴 智 軻

〈提要〉

本文基于约翰·厄里“游客凝视”这一概念,通过分析清末留日知识分子及留日学生的典型日本观,对中国访日游客“对日凝视”的“古层”,即原型及框架形成的基本要素进行了探讨。本文从竹内好所称的“中国人日本论之三白眉”着手选择分析文本,对黄遵宪的《日本国志》,《日本杂事诗》,清末留日学生笔记,周作人的系列散文以及戴季陶的《日本论》及蒋百里的《日本人》等所展现的“对日观”进行了梳理,并从源于“自我意识”的对等感觉等深层要素对观光所形成的日中“相互凝视空间”所存在的问题进行了探讨。

1. はじめに

「楽浪海中有倭人,分爲百余国,以歳時来献見云。」中国の古典『漢書』(卷二十八下・地理志第八下)に残るこの一文は「日本/日本人」が中国人の視野に入った瞬間を記録した。古代中国は日本にとってまさしく司馬遼太郎がいう「文明の灯台」¹⁾のような巨大な存在であった。千有余年にわたる日中の交流史を点検すると,海を隔てて無数のまなざしが交錯してきたが,そのまなざしの交換空間は少なくとも近代まではほぼ一貫した秩序,すなわち「華夷思想」に基づいて形作られ,整序されてきたものと言えよう。桂島宣弘(2001)が言うように,「中華帝国」と「東夷の小帝国」との秩序関係が,長い間「華夷思想的自我認識」の中に身を置いてきた両国のエリート層や知識人によって広く受容されてきたのもまた事実であろう(pp. 235-272)。いうまでもなく,まなざしの受容,解釈等の生産過程に関わるのは主に知識人であった。しかし,文明の中心と周縁構造には往々に支配と従属の関係性が付随しているために,このような空間での対等な相互的なまなざしの実現は無論困難である。中国側の無関心ともいえる時折漠然とした視線を背景に,いわゆるまなざしの交換においては日本から中国への熱い目線が圧倒的に多く,構造的に終始傾斜していた。

中国がいよいよ日本に真剣なまなざしを向けるようになったのは日清戦争以降を待たなければならない。日清戦争直後から日中戦争の勃発まで,少なくとも10万人前後の中国人学生が海を渡って日本に留学した。中国の気鋭の文化人として知られている許知遠(2018)はこれを,中国より「史上初の近代化を目指す,正真正銘の大規模な知識人の移民潮」が日本に押し寄せたと形容する。しかし,その時の日本はすでに西洋とのまなざしの交換をより強く意識するようになって

ていた。吉見俊哉ら（2002）が指摘する「西洋のまなごし」に「準拠して支那や東洋の弱小国を位置づけていくヘゲモニックなまなごし」（p. 59）の台頭が、これまで中華文明圏の自他認識によるまなごしの秩序空間に決定的な動揺と解体を起し、その構造に根底的な変容をもたらした。

もとより本稿の関心は、比較文化論や国際政治論など高邁な視点から両国間のまなごしの秩序空間の形成や変容を詳らかに追跡するところにはない。これより先に論じるまなごしのほとんどはあくまで観光学者アーリ（John Urry, 1946-2016）が自著（2011=2014）で提示した「観光のまなごし」（p. 4）という現代的な学問的視座に依拠するものである。つまり「他者との遭遇経験」を前提に、「個人の体験や思い出」、「または流布しているあれこれの場所についてのイメージとテキストによって決まる」（p. 4）まなごしであり、「他者」を確認しつつ、種々の感覚的経験の中で自他の関係性を秩序立て整理するものである。（p. 21）

ここ数十年の訪日中国人観光客の大挙到来は、日中交流史上において、さながら史上初の中国側からの越境民族大移動というほどの未曾有の状況を作り出している。それは同時に日本に向けるまなごしの中国側の生産者は未曾有の構造転換を迎えていることをも意味するが、その構造転換についての多層的な分析は必ずしも十分になされていない。すなわち、今日の状況はあたかも経済的要因による自然発生的事実であるかのように捉えられており、中国人観光客のまなごしを形作る枠組みに、歴史的文化的政治的に形成されてきたまなごしの交換空間との連動構図や、その背後に通底する連続性が存在する可能性についての言及は意識的／無意識的に回避される感が否めない。

筆者（2020）は日本に向ける中国人観光客のまなごしは、国内から国外へとその視野が拡大されるにつれ、中国人としての自意識の再確認に基づく再構築の過程にあるとの試論を行い、それらのまなごしに通底する通時的要素の提示を試みた。しかし、綿密なテキスト分析に基づく内省的考察を十分に展開できなかったために、現状合わせの結論先行的な形にとどまった。それを補足するには、少なくとも次の二点からの追加作業が必要であると筆者は考える。第一に、日本に向ける中国人観光客のまなごしを決定する枠組みの形成要素を、異なる歴史時期の異なる社会層による経験の重層的なダイナミズムから捉え直す必要がある。第二に、自他意識という通時的要素が存在している以上、その動的なメカニズムを究明するためには、その発生、変容が生起する際の参照系の析出を分析軸として据える必要がある。

もちろん上述の二つの追加作業は一篇の論考で完遂できるものではない。紙幅の制限で、本稿はその初歩的な作業として、1) 清末に訪日／留日した経験のある知識人が残した記述や著作によって紡ぎだされた原初的な対日観を、「観光のまなごし」形成上の既存の枠組みの「古層」²⁾、すなわち今日の中国人の日本に向けるまなごしの基底にあり続け、その枠組みの形成に影響を与えてきたテキストとして捉え、その点描を試みたい。数多い著述から本稿は特に「自（中国）他（日本）」ともに認める良質な日本論／日本人論を主な素材として取り上げ、それらの言説空間を分析し、基本構図の析出に主眼を置いておくことにする。2) 「観光のまなごし」の形成には、他者を確認しつつ、自他の関係性を秩序立て整理するプロセスが終始存在するというアーリの議論

をベースに、「自他意識」に基づく「対等な感覚」をまなごしの形成、変容に影響する「深層」的な要素と位置づけ、1) の整理作業を踏まえたうえで、今日の中国人観光客の日本に向けるまなごしの特徴を検証しながら、その機能メカニズムの一端を提示してみたい。

2. 日清戦争までの中国知識人の日本に向けるまなごし — 対等を目指して

戦後中国研究の第一人者として評される竹内好（1910-1977）は、1972年に市川宏によって邦訳された戴季陶の『日本論』に解説文を寄稿し³⁾、黄遵憲（1848-1905）の『日本国志』と『日本雑事詩』、戴季陶（1881-1949）の『日本論』、それから周作人（1885-1967）の一連のエッセイを中国人の書いた日本および日本人論の中での「三白眉」とし、「どれも独特の史眼と洞察力をそなえていて、われわれを裨益すること多大」（p. 244）であると絶賛した。

戦後から20世紀70年代までの日中関係は冷戦という大きな国際環境に深刻な影響を受けていた。敵対関係が続いていた中では、一部の貿易と民間外交と称されるものを除いて人的往来や文化的交流はほぼ断絶状態にあった。竹内好が専ら戦前のもものを取り上げて論評する理由の一つは、このような文化交流のほぼ全面的断絶によるイメージの相互生産の停止にあるともいえよう。しかし、裏を返せば、竹内好の言説はそれまでの中国人による日本論や日本人論の貧弱さを物語っているだけでなく、その質においても西洋人の書いた日本論に比べて評価に値するものが少ないことをも暗に示唆している。「三白眉」という竹内好の選定結果はいわば日本の識者が中国人の対日観に求める理想的な基準を示すものであるが、現在に至っても両国の学界からそれを正すべきとの声が上がりずほぼ定説となっている。

しかし、今日の中国国内の状況に限ってみれば、中国人観光客の対日イメージ、さらに厳密にいうとディスティネーション・イメージの形成において、上述の著述がテクストとして与えてきた影響は必ずしも一様ではなかった。後述するが、それぞれの著述の視点はその時代背景や著者自身の「他者との遭遇体験」によって異なるし、その影響力もまた著者自身の運命によって左右される側面がある。

2.1 「外国としての日本への無知」を喝破する — 黄遵憲の対日観

宇野木洋（1991）は、黄遵憲を「清末の知識人の中で伝統文化と西洋文化の対峙という問題を、皮膚感覚を通して最初に鮮明に意識した人間の一人」とし、彼のことを「ほぼ一貫して日本を東方の野蛮国とみなしてきた中国が、伝統的偏見を捨てて、外国としての日本を知ろうと努力した」最初の人物とも評している。1878年から1882年にかけて清国公使館員として日本に滞在していた黄遵憲は、当時の状況について次のように述べている。

余観日本士夫類能談中国之書，考中国之事。而中国士夫好談古義足以自封，于外事不屑措意。（私の見るところ、日本の士大夫が中国の書を論じ、中国のことを考証できるのに対して、

中国の士大夫は古義を論ずることが好きで自封（狭い天地に閉じこもる）に満足し、外事に意を措くことを潔しとしない。—— 訳は筆者）（『黄遵憲全集』p. 819）

このような状況を危惧し、特に明治維新に深い感銘を受けた黄遵憲は在任中『日本雑事詩』を上梓し、『日本国志』の執筆を始めた。その後、黄遵憲はサンフランシスコ総領事に赴任し、85年に帰国し、87年に全40巻50万字にも及ぶ大著『日本国志』を脱稿した。

1871年に締結した「日清修好条規」と「日清通商章程」により、清国と日本の正式な外交関係が樹立され、両国の交流はいよいよ対等な立場で展開されるようになった。黄遵憲の『日本国志』はその両国の対等を目指そうとする交流拡大の産物ともいえよう。『日本国志』において黄遵憲は、日本を「同類同文の大国『大同』とみなし、お互いに助けあう必要性を」訴えた。彼は、「西洋化ないし近代化へ向けた急激な展開を成し遂げつつある」日本に対し、「一種の驚きと畏敬の念」を示すと同時に、「日本の伝統風俗文化に中国古代の習俗の継承を見出し、その源流を中国古典の記述に典拠を求めている。」（宇野木 1991）

しかし、後世の両国の識者によって「中国人による日本についての初の本格的な学術研究書」と位置付けられる本書は最初あくまで抄本として小範囲で流通しただけで、正式な出版にたどり着くまで10年近くの歳月を要した（程天芹 2011）。日本との国交を樹立したものの、清国においては朝野を含めて日本に対して「禍を防ごうとする見方は存在する一方、軽視する心もある（存防禍之見、有軽視之心）。」そのため、「天朝上国」の自大主義に反対し、「偏袒せず、貶損せずに」日本を直視し、「華夷秩序」を根本から見直そうと主張する『日本国志』は、洋務運動を推進する一部の官僚や識者に評価され推薦されたが、清朝廷に軽く受け流され、清国の対日観を「上」から大きく変更させることはなかった（張萍 2016）。

2.2 日本に向ける黄遵憲のまなごしの特徴

日清戦争の敗戦に大きな衝撃を受けた中国では、敗戦後によく日の目を見た『日本国志』はにわかに世間の注目を集めた。特に梁啓超、康有為など洋務運動の推進に励む立憲維新派の官僚や文人に激賞された。1898年、康有為は20巻12冊約12万字の『日本変政考』を綴り、時の光緒帝に上呈し、維新に成功した日本を中国の「向導之卒、測水之竿、探險之隊、嘗葉之神農、識途之老馬」とし、「以強敵為師（強敵を師とすべし）」と力説したが（周維宏 2000）、その長文政論自体も『日本国志』によるものが多かったと指摘されている（鄭海麟 1988）。

両国の学術界における黄遵憲の百余年來の評価の全容を的確に捕捉するのはこの論考には手に余る作業であるが、今日の視点から見れば、中国人の対日観に与えた黄遵憲の影響は何よりも次の二点に集約できる。まず、日本に対する中国側の無知と軽視を喝破した点である。すなわち梁啓超が「日本国志後序」において指摘したように、黄遵憲はまさしく近代において「中国人寡知日本者也（中国人は日本を寡知するものなり）」という現状に対する警鐘を鳴らした最初の識者であった。

もう一つはほかでもなく「日本を大国（大同）」とみなす、日本に向けた対等なまなごしである。これについて宇野木（1991）は次のように指摘する。

大国という認識は、中華思想に基づく小国日本という意識が普遍的であった当時の中国人知識人の間にあっては、まさに画期的な視点であったことは何度確認してもしすぎとは言えない。

その認識はすなわち日本と中国の関係性を自他という構図に持ち込んで見直そうとする初歩的な試みとみてよい。『日本雑事詩』や『日本国志』の創作において終始一貫確認できるのは、日本と向き合う際にできるだけ私見を挟まずに忠実に網羅的に記録しようとする黄遵憲の真摯な態度である。在日中、黄遵憲は日本の文人や政治家と密な交流を行うことを常に心掛けていた。両書の刊行時期は前後するが、いずれも綿密な考証と訂正によってその正確性が担保され、憶測がなるべく排除された、と黄遵憲自身も自負している。『日本雑事詩』の序では以下のように述べている。

今從公使後，擇其大要，草『日本志』成四十卷，復舉雜事，以國勢・天文・地理・政治・文學・風俗・服飾・技藝・物産為次，衍為小注，弗之以詩。余雖不文，然考於書，徵於士大夫，誤則又改，故非嚮壁揣摩之譚也。（私はいま何公使のあとをうけて、かの国の大要をえらび、『日本国志』を草して四十巻とした。それとは別に雑事をとり上げ、国勢・天文・地理・政治・文学・風俗・服飾・物産という順序にして、これを敷衍して解説を加え、これらを詩でつないでいった。わたしは文章はまずいが、かの国の書によってかんがえ、かの国の士大夫にたずね、あやまりがあれば、あらためた。だから、いいかげんに、臆測でつくりあげたものではない。—— 訳は実藤恵秀・豊田穰訳『日本雑事詩』p. 285を参照）

2.3 黄遵憲の対日観の限界

日清両国の国交が樹立された後、清国の官僚や文人が次々と日本を訪れるようになり、数多くの遊記や詩文を残したが、その所々になおも天朝大国の優越感が露呈し、明治維新に対しても必ずしも肯定的な立場をとらなかった（孫瑛翰 2018）。知識人の多くは自己満足で中華以外の世界を無視または軽視し、すでに廃頹した清国を依然世界の中心として考えていたので、たとえ日本に行っても、日本の生活文化に向けるまなごしも散漫であった。「来日早々から多くの旧文人に囲まれ、知らないうちにだんだんその影響をうけ、明治維新を批判したり、政治と縁遠い『いき』の世界に逃げたりして、見物遊山の旅行記や猟奇趣味からの文章しか残せなかった。」（温穎 2007）その意味からいうと、日本の伝統文化、風俗習慣などを省察的な目線から網羅的に取り上げる『日本雑事詩』、及び日本の歴史を詳細に考察し、維新の成果を客観的に分析評価する『日本国志』は極めて異例な存在であろう。

しかし、指摘しておきたいのは、黄遵憲が日本を眺め論じた際に見せようとした対等なまなごしは、あくまで明治初期という時代背景を抜きにしては語れないものである。アヘン戦争以降の中国は内憂外患に苛まれながらも、少なくとも日本側から見て老大国としての尊厳はかろうじて維持されていたようである。一方日本においても維新が始まって十年、国力は増強しつつあるが、なおも植民地化の危機が消え去っておらず、日中の連帯によって西力東漸の阻止を図ろうとする日中唇齒輔車論が朝野を問わず存在した。何よりも、幕末明治初期、漢文の素養は日本の文人高士にとってなお必要不可欠なものであり、漢字文化圏の共通した集積知とされる漢学への尊敬の念は依然根強いものがあつた。日本語を決して得意としなかつた黄遵憲と日本の文人同士の交流においては「漢文による筆談が主であつたが、清国人の作家と日本人の作家と全く区別されず（むしろ若干の尊敬をもって）いわば同じ『教養』を共有する同時代の詩人という形で抵抗なく受け入れられていた。」（宇野木 1991）

「対等なまなごし」は少なくとも文人同士が向き合うときに守られるべきルールであり、漢文化しいて言えば中華文明への尊敬は必ずしも衰退が留まるところを知らない清国に向けられたものではなかつた。それにしても、中国文人の自尊心をそれなりに温存する環境は当時の日本にはなおも残っていた。言い換えれば、黄遵憲が感じた日中間の「対等なまなごし」の可能性は、両国の知識人が共有していたコミュニケーションツール、すなわち漢文及び中華文明に対する当時の日本側の知識人の深い理解と尊敬によってかろうじて担保されたものであろう。

宇野木（1991）は、黄遵憲は「明治維新の日本の中で、『変わったもの』と『変わらないもの』を区分し、『変わらないもの』の起源を中国の伝統文化に見出そうとする」とみる。これは文化伝統上の同一性に由来する、日本に対する「親近感」の顕現だという好意的な解釈も成立する。しかし、中国の伝統文化による解釈への固執は裏を返せば、黄遵憲の漢学の効用に対するこの上ない自負としても受け止められる。『日本国志』において黄遵憲は日本の幕末志士が唱えた「尊王攘夷」の思想的基礎を中国の古典『春秋』に求めただけでなく、西洋学の源は「墨子から生まれたのであろう」と断じた。つまり、黄遵憲は維新を成し遂げ強国にまい進する日本を評価する際、「天朝大国」の自大を極力回避しようとしたものの、「日本の学にせよ、西洋の学にせよ、それらのいずれも中国の経書から生まれた」（孫瑛鞠 2018）という論調からわかるように、「中華文明」に対する「自大」に近い自信を隠そうとしなかつた。

2.4 中国人の対日観における『日本国志』と『日本雑事詩』の影響

『日本国志』はそれより先に上梓した『日本雑事詩』と同様、難解な漢文で書かれ、「典誌評」という古典史書の形を忠実に踏襲している。このような知識人向けの対象限定の著作は大衆との距離が容易に想像できる。一方、『日本国志』はあくまで帝政の維持を目的とする改良主義を提唱していた。その主張には清王朝の打倒を目指す革命派のそれと体質的に相いれないものがあり、発刊直後こそ多くの書局が争って刊行したが、洋務運動の終結とともに人気は衰え、その流行は長く続かなかつた。

『日本国志』が中国で再び脚光を浴びるようになったのは日中の国交が回復した80年代に入ってからである。「1970年代末から80年代初めに文革が終わると、中国は突如として、日本が真昼の太陽のように輝き、世界第二の経済大国となっていることに気付き、中国人の間で日本文化研究の願望が再び芽生えた」(趙徳宇 2016)のを背景に、『日本国志』は「清朝末期の中国人によって著された日本の歴史に関する百科全書式の大著」として再評価されるようになった。しかし、黄遵憲及び彼の著作についての関心はあくまで歴史や文学研究者の間にしか見られず、日本を大国とみなし、「偏見を持たずに対等」に扱うべきとする彼の百年も前の主張も必ずしも強調されるポイントではなかった。

『日本国志』は「鎖国の中国封建社会後期において、中国人が目を開いて世界を見る代表作」(王錦貴 1999)と称えられたが、「日本ではなく、世界を」というその評価からもわかるように、文革期という新たな鎖国が解かれた後でも中国の「文人識者」が『日本国志』を通して見ようとするのは「日本」ではなく、その背後にある「世界」である。目を開いても、そのまなごしは日本を乗り越えてむしろ世界=西洋に投げかけられているという古い構図には何ら変更もなかった。

前述のように、古文・漢詩で著された『日本国志』や『日本雑事詩』は一般民衆にとって敷居の高い存在である。その意味からいうと、清朝末期だけでなく、今日の日本に向ける一般中国人のまなごし形成においても黄遵憲の存在は極めて薄いと云わざるを得ない。のちに触れる周作人は『日本雑事詩』に深く感銘を受け、黄遵憲を「日本の風俗を記述した中国人のうち最も理解に富む」者(周 p. 193)と高く評価したが、「民衆は彼のことをほとんど知らず、学術界でも彼に対する偏見があり、彼のことを主に詩人として評価し、文学史における影響のみに注目している」(張永芳 2010)という今日の論評が示しているように、黄遵憲の知日派としての一面はいまだに大衆に認知されないままとなっている。

3. 日清戦争後の留日学生の日本に向けるまなごし

日中両国のこのような微妙な対等的なまなごしは日清戦争での清国の敗北によって早くもその芽を摘む形となった。しかし、中国国内では日本を敵視する機運が高まることなく、むしろ中国の自国政治体制に対する反省が刺激され、日清両国は迅速な和解を実現した。1898年から1907年にかけて大量の留学生や知識人の来日し、いわゆる近代「日中関係の黄金の十年」(祝曙光 2015)が現れた。近代日中両国の国運の消長を決定したと言われるほどの激戦の直後に、両国の交流史上稀に見る蜜月期が期せずして到来したのは、今から見れば頗る奇妙な現象と云わざるを得ない。中国人の対日観は日清戦争によって大きな変更を迫られることになったが、日本を敵としてみなし切齒扼腕するよりも、臥薪嘗胆して列強に伍するために、まずは維新に成功した日本を手本にし、それを見習って我が物にする意気込みのほうが強かったようである。

日清戦争後、1986年に13名の若者が高等師範校長の嘉納治五郎(1860-1938)のもとに預けられたことを皮切りに、中国の知識人や留学生が大量に来日し、1905年に8000人、1906年に1

万人越えになったと言われている(杉山文彦 2009)。本来これだけの中国人が日本を師とすべく勉学や視察に励んでいた以上, その中から『日本国志』や『日本雑事詩』に勝るほどの日本論や日本人論が量産されるのも不思議ではなかったが, 竹内好が認める好著は戴季陶の『日本論』と周作人のエッセイしかなかったのは何故だろうか。

3.1 精神的屈折とその増幅 — 日本側のまなざしの変質による影響

『日本留学精神史』(1991)を著した巖安生(1937-)はその世紀の転換期に大挙して来日した中国人はまず日本に対して精神的な屈折を持っているのだと指摘する。日本にやってきた人たちは, 「国では育ちもよく秀才の誉れも高かったに違いない」(p. 281) 一群である。しかし, 日本への留学はすなわち日中交流史上かつてみない師弟関係の逆転を認めたことを意味するものである。留学生のほとんどはこのような日中文化間における優劣関係の逆転にはどうしても素直になれなかった。巖安生(1991)は周作人の言葉を引用して当時の留学生や渡日した知識人の日本観について次のようにまとめている。

清末, 章太炎が日本に亡命していた時, 常に書を頼みに来る日本人に『孟子』の一段を書いて曰く, 逢蒙, 射を羿に学ぶ。羿の道を尽くして, 思へらく, 天下惟羿のみ己に愈れりと為す, と。是に於て羿を殺せり。 — それは中国知識階級の日本に対する最も普通な感想と言えよう。(p. 280)

日本にやってきた知識人や留学生のこのような精神的屈折は日本国内の中国観の変化によってさらに増幅される側面もある。特に日清戦争を境目に日本人の中国観の変化が顕著にみられたと指摘されている。一つは増田史郎亮(1970)が指摘する「従来の劣等感から優越感へ」の変化であった。日清戦争の勝利によって日中の従来の位置が逆転し, 大国意識が急速に芽生えた日本人は, それまでの中国に対する畏怖または尊敬の念が薄れ, 「従来の劣等感を逆にして優越観を持つように至った」。それと同時に現れたのは, 「憧れ」から「蔑視」への変化である。この時期の日清関係の質的变化に注目する小島晋治(2002)は, 両国の関係が「対等且つ平和な関係」から「侵略と被侵略の関係」へと変化するにつれて, 多くの日本人の中国観に「古昔」と「現実」が二分する中国が次第に定着してきた。漢文などに代表される中華の古昔に対する敬意は残りつつも, 弱体化する一方で無残な大敗を喫した現実の中国や中国人に対する蔑視は深まっていたと論じている。

いうまでもなくそのような蔑視は日清戦争前に外交使節として来日し, 漢文に精通する日本の政治家や文人と交流し, 中国でまだ無名でありながらも日本の漢詩界で「泰山北斗」と崇められていた黄遵憲に向けられたことがない。その主な対象は日清戦争後に日本にやってきた「支那留学生」であった。「支那留学生」に対する蔑視や差別は「日本の当局者, 政治家, 教員, 商人, 下宿屋主人, 下女, 掏兎, 窃盗, 淫売婦」など日本社会の各階層に広く存在し, 「支那留学生」

は「日夕豚尾漢として軽侮され, 嘲笑され, 詐取され, 貪絞され, 誘惑」されていた(宮崎滔天 1973)。

日本で「支那留学生」と文人たちを迎え, 親身に世話をし, 文人の交わりを求めてくる日本人も概して中華の「古昔」に憧れる漢学系の老政治家や文士が多かった。しかし, プライドが高く敏感な中国知識人にとって, 一部の人々が「親近感に紛らせながら示した傲慢や独りよがりの態度は」「露骨な侮蔑よりも苛立たしく, 我慢しにくいものであった」。「それこそが結局留学生たちを日本と日本人に近づけさせなかった一大障壁」となった。(巖 p. 30)

「学びに来る中国人学生が外面では日本人を尊敬するように見せかけながら, 内心では軽蔑し, これを迎える日本人が日清戦争以前のコンプレックスが変じて日清戦争の勝利によって裏返されて内心, 外面ともに中国人を軽蔑したとするならば, 両者の相互理解も不可能であるし」(増田 1970), 交換されていたまなごしにも対等性を求めようとする努力がまず存在しえなかったと言えよう。

3.2 日本の他者としての不在 — 日本において西洋を学ぶ

それではこのような師弟関係の逆転を嫌々ながらも受け入れざるを得ず, 侮辱さえ甘受する留日学生が目指した目標は何であったろうか。この点については少々長いが, 増田史郎亮(1970)「清末, 中国人日本留学界の一側面」の結論を引用したい。

彼等が日本に学ぶというのは日本そのものでなく, 日本を通じて西洋を学ぶためであった。今迄教える位置にあったし, 而も中体西用思想, 華夷思想をこの後も強く残している中国の状況から見るとそれは無理からぬところであったが, 若干の軽蔑と尊敬を含み乍ら, 日本を利用しながら西洋に学ぶために留日留学を考えたというのがその実情であったと言えば言い過ぎであろうか。張之洞も「勸学篇」では繁雑な西学を日本人は刪節し酌改しており, 径も近く, 渡航, 留学の費用も安く而も同文同種であると言うのである。無論日本の成し遂げた成果を全然見ようとしなかったのではないが, その本当の真意は上記のところであったとみて差し支えないのではなかろうか。(下線は筆者)

志の高かった一部の留学生が目指していたのは「乃ち漢魂以て欧粹を吸えり」(巖 p. 49) というものである。課目の勉強などそっちのけで欧米新思想の涉獵と吸収に明け暮れたそれらの学生にとって, 「東瀛」はまさしく新しい知識の集散地ではあるが, それ自体が探求, 研究の対象とはなりえなかった。留学生によって創刊された最初の雑誌, 『訳書彙編』は「専ら欧米の法政名著を編訳するを以て宗旨とし, ルソー, モンテスキューらの名著を逐一訳出して掲載したもの」(巖 p. 52) として, 留学生の愛読書となった。もとより, 日本に留学しているのに, 欧米新思想への接触は日本語ではなく, もっぱら母国の中国語を経由して行うというのは, 漢魂の維持にはいくばくか機能するかもしれないが, 日本社会に溶け込むための語学力の向上にはつながらない

ことは言うまでもない。

さらに指摘しておきたいのは日清戦争を境に、留日学生の質に大きな変化が見られた点である。それ以前の留学生は「すべて官費の留学生か、当時生まれたばかりの官僚資本が派遣した特別の学生であった」(増田 1970) に対して、日清戦争後、自費の学生や、洋進士、洋挙人を目指し、出洋を持って立身出世、獵官の道具にする学生も増え、「玉石混交、千姿万態」(巖 p. 342) の様相を呈し、勉学に対する態度も一様ではなかった。

3.3 速成留学と短期視察 — 日本に向ける粗雑なまなごし

このように多様化した留日学生を巖安生は「各種の『〇〇救国論』を奉ずる勉強組、亡命客と同志糾合を日課とする運動組から、東洋遊学イコール新式科挙のつもりの銀メッキ組」に分けたうえ、その学習状況について次のように指摘する。

留学生自身の修業状態にも問題が多く、なかんづく目標の不安定と不純、集中力の欠如、「同文同種」にかこつけての怠惰やまやかしなどよからぬ状態の存在していたことは認めなければなるまい。(巖 p. 301)

現に清末十年間日本にやってきた2万人を超える留学生で大学に入れたのは1%もなく、高校レベルを入れても5%未満であり、6割の留日学生は、1年あるいは数か月で卒業できる「粗雑な」速成班で学んでいた。残りの3割は2年半で卒業できるとされる中学校レベルの普通科で勉強していたが、「二年半のうち、日本語だけ勉強しても十分でなく、その他の学科は往々にして有名無実である。」(巖 p. 304)

大多数の人は必ずしも満足に安定して勉強していなかった。「我が国の志士」との連絡に勤しみ、同志を糾合するために奔走していた革命派の遊学生は、勉強をそっこのけで革命こそ情熱を傾注すべきものだとして決めていた。郷党をはじめとする友達の往来が毎日続き、時間の半分は交際に費やされるのは当時の「留学界の一般的な気風」(巖 p. 309) とされた以上、「普通」の留学生であっても、勉強に注入できるエネルギーもおのずと知れる。日本に六年間留学し、東京士官学校を卒業し、辛亥革命の元老として知られた石陶鈞(1880-1948)も留学初期「直接接触しているのはやはり第一位(同郷の)湖南人、次は他の中国人留学生で、日本社会と日本人との接触はごくまれであった」との回想を残した。勉強組の代表とされる魯迅(1881-1936)も仙台に移り住み、「彼の(日本人の)学生社会」に入るまで二年の歳月を要した、と言われている。(巖 p. 310)

一方、速成を狙ってやって来た「獵官」留学生の勉学状況はもっとひどかった。その一群に対して、巖安生は特に厳しい評価を下した。彼は「学生のほとんどが私利私欲と功名心を挟んで体裁ばかり取り繕い、一知半解の学を取って」帰ったと指摘し、その中で師範速成科はまだしも、とくに法政速成科に対する後世の評判が悪いと結論づけた。巖安生は汪兆銘(1883-1944)ら一

部の革命派を除いて、後者の主流はやはり「科擧の士、功名の徒」であったとし、日本側の配慮もあり、「授業は通訳を通して行われ、試験は漢文でしか書けなかった」彼らは、「全留学生の中でも勉強心と感受性にかけては劣っている」と批判する。まさに嚴安生が嘆いたように、速成教育で実力がつくかと甚だ疑問だったにも関わらず、官界指向が強いこの一群から、帰朝後「新しいエリート官僚と浅薄な代議制運動家」が多数生み出され、近代の中国社会において一大勢力群をなしたのもまた皮肉な事実である（嚴 pp. 88-89）。日本語をも解せずに、日本を自らに銀メッキを施す工場と捉え、あくまで自国での地位と富に汲々とする「法政速成組」から、日本と真剣に向き合おうとする知日派や良き理解者の誕生は期待できない。これもまた「留日最も悪く、留欧はその次に悪く、留米は比較的よい」⁴⁾という評価が世に残った由縁であろう。

1905年前後に、速成留学とともに押し寄せた留日の潮には短期視察の遊歴官紳の一群も含まれていた。本来、短期視察は清朝政府によって打ち出された新策の一環であるが、いつの間にか「物見遊山ひいてはお楽しみが」主たる目的となった。楽しみを求めてやってきた遊歴官紳こそより近代的な観光者に近い存在だとも考えられるが、これらの人々が日本に向けたまなごしはどのようなものだったろうか。嚴安生が引用した次の一文はその種々相を理解するうえで頗る参考になるものである。

近年来、中国の官紳の来日は潮のようで、各工場や学校では日に日に参観接待に追われている。一方、接待の人が親切で、丁寧に案内と解説をしても、聞く方は集中せず、歩きながら三々五々騒いだり笑ったり、ところかまわず痰を吐いたりするのが多かったため、人の白眼視を招くようになった。以来、参加先がこれら遊歴者を嫌がり、断り切れない場合でも通り一遍のことしかしてくれなくなったという。（嚴 p. 347）

中国側の遊歴官紳にみられるマナーの悪さと日本側が見せる「白眼視」は今日の状況を彷彿とさせるところがあるが、連続性についての考察はあとで触れることとする。遊歴組が残した『日本遊記』類のものは二百余种に及んだものの、嚴安生は「全体から見れば、日清戦争前の黄遵憲らによる名著好論は別として、日本遊歴以来、漢字の国の便を幸いに『(既成の条文)や風俗をよせあつめ、以て行程を証する式の視察紀行が』極めて多い」と嘆き、「一番生な体験が多いはずの留学生諸君によるものが——彼らには記録や報告の義務または体裁を繕う必要もなければ、自家版を出すほどの金力もなかったためだろう——ごく少なかった」（嚴 p. 350）と留学生の怠惰ぶりを皮肉った。

「見学日録や資料丸写しがほとんどで実感と堂に入った見解が含まれていない」これらの遊記類を「清末中国人の日本体験と日本観の全貌を反映したものと受け止めるのは要注意」（嚴 p. 350）と言われるのも無理はない。もとより、速成班の留学生や遊歴組の視察官紳は「玉石混交、千姿万態」と揶揄されるほどその質やモチベーションのばらつきが大きい。いわゆる「長期滞在組」の留学生に至っても、そもそも日本における中国人の世界にどっぷりと浸かっていた人が圧

倒的に多かったために、良質な日本論や日本人論の量産が期待できないのは又無理もないことであろう。

3.4 運動組の日本に向けるまなごし — 日本を鏡にして「満漢の異を照らす」

孫文や康有為、梁啓超らが亡命してきた日本は「運動組」の留学生にとって「活動家の勢ぞろいの場」であった。これらの留学生は勉学をそっちのけでエネルギーの多くを「革命と満州排撃」に投入した。当時の状況について嚴安生が引用した魯迅の『而已集』の「略談香港」の一節から伺える。

当時の留学界で革命思想を抱くものがかなりいた。革命とはいっても実は種族革命のことで、国土を異種族の手からもとの主に取り返そうというものであった。実際運動に移るほかに、新聞を出すものもいれば、古い書物を写すものもいた。写したのはほとんど中国に見当たらない禁書で、内容はたいてい明末清初の状態なので、青年たちに猛省を促すことができる。(嚴 p. 54)

革命運動に熱をあげ、中国語の新聞発行に励み、満州支配に対する敵愾心を煽る中国語の古書を写す作業に明け暮れた際に、これらの留学生のいわゆる「観光のまなごし」は日本のどこに向けられていたのだろうか。時々、家々の佇まいなり店の飾りや看板の書体に存する「唐代の遺風」に感じ入り、漢の儀服を思わせる和服に興奮を覚えることによって、留学生の「漢民族主流時代への郷愁がそそられ、反満または変革の決意を掻きたてられるケースが多かった。」(嚴 p. 56)という。『日本留学精神史』にある次の一文は当時の留学生によるものだったが、「支那留学生」と日本人が街頭で交わしたまなごしの構図を見事に活写しているので、少々長いがここで抄録する。

先に日本に遊学し、そこの文人や庶民に接触して、彼らの礼法習俗で二百六十年前までの我が大漢民族のそれと異なるものがないことに気づかされる。街に出れば大通りに呉服屋とかが軒を並べ、その服の様式といい縫い方といい、また二百六十年前までに我が大漢民族に固有だった服式に合わないものはないので、心ひそかに感を興さずにいらなかった。翻って、彼らにわれらの服のことを聞かれれば、いつももじもじして言葉を失ってしまう。ひどい場合には私たちを取り囲み、身になっている服装をつついたり哄笑したりする。あるいは支那服か、今日の支那人はこんな服装をするのか、といかにも怪しむようで、また軽蔑している。中でも、歴史の事情を知って、思いやりのある年寄りなどは「おれたちの服に似たようなものが、今の支那にまだ残っているか」ということに関心を寄せるが、もうないと答えれば、彼らもとかく驚嘆に耐えない表情になる。もし念のために、仏教や道教の僧侶の服に、京劇の舞台衣裳に、または冠婚葬祭の式服にまだその影が残っている、とでも付け加えていえば、

彼らはまた大きな慰みがつかめたような表情を見せる。その場に居その様子を見てみると、私はますます羞恥と傷心を抑えきれず、体にまとっている胡（異族＝満州）服をずたずたに引き裂こうとするほどであった。（巖 pp. 56-57）

アーリ（2014）は観光客とそのまなごしの向ける先との関係を次のように述べる。「私たちはあるモノをただ見るということではなく、いつでもモノと自分たちとの関係を眺めているのだ。」（p. 3）その意味でいうと、満州排撃に躍起になった留学生はただ日本の古い町並やモノを見て感嘆しているだけでなく、唐や漢や宋や明など漢民族主流時代の遺風の数々によって自己の民族のアイデンティティを再確認させられた。しかし、ここでは日本が他者として認識されているというよりも、むしろ「我々の古昔として」留学生の漢民族の自意識を無慈悲に刺激し「自我／敵我」への猛省を促したと言えよう。支那服や辮髪こそ「我が皇漢人種が牛馬となり奴隷となり、漢唐の衣裳をすて父母に受くる髪膚をさって満州人に服従した一大記念碑である」（巖 p. 123）がために、それらに対する軽蔑や嘲笑は「我々よりも我々らしい日本人」から与えられたからこそ、より恥じ入りより屈辱を感じたのであろう。いうまでもなく、「韃虜の駆除、中華の回復」を自らの大任とする運動組の留学生にとって、憎むべき「他者＝異民族＝敵」はあくまで満州人である。一方、日本は古き良き時代の中華を提示することによって、満漢の差異をなおも鮮明に照らしだし、漢民族が受けてきた屈辱的な過去を改めて浮き彫りにする、鏡的な存在であろう。

4. 周作人の日本に向けるまなごし — 日本的な生活と情趣を中心に

巖安生が言うには「留学史及び前近代史に名を残せたのはほとんど第一（勉強組）、第二部類（運動組）の人々で、この人たちは数の上では少数であった」（巖 p. 302）。その「少数」には当然周作人と、のちに触れる戴季陶、蔣百里（1882-1938）などが含まれている。

周作人は1906年に海外留学試験に合格し来日、法政大学予科で予備教育を受けた後、1908年に立教大学に入学し、英文学と古典ギリシア語を学ぶ。1911年に留日生活を終え帰国し、1917年に北京大学文科教授に就任する。この略歴からもわかるように周作人は「勉強組」においても極めてまじめで優秀な部類に入った人物だと言えよう。

4.1 「一半は異域、一半は古昔」

周作人の日本に向けたまなごしは彼が著した『日本之再認識』にある一文にその原点が伺える。「日本にいて受けた感覚は、一半は異域、一半は古昔、而もこの古昔は現に我が国ならぬ異域に健在しているものである。」（巖 p. 55）というように、日本に残った中華文明の古昔に感動を覚える点において、当時の留学生に多く存在する民族主義者の感覚と共通しているように思われる。しかし、古昔に注目し、思古の幽情に耽った末、「満州大仇」に不倶戴天を誓う運動組の留学生と異なり、兄の魯迅が帰国すると同時に、周作人はむしろ日本語の勉強に本腰を入れ、日本その

ものに深い関心を示すようになった。「異域」の「異」たる由縁, すなわち「日本の生活と情趣」を, 身をもって日本の生活に溶け込み, それらを体験し表現し究明しようとした。戦前戦後を問わず日本の識者が一貫して絶賛するほどの業績を残せたのは, 清末以来の日本留学史を通してみても, 周作人のみだったといえよう。

「日本にやってきて少しばかり技術を覚えて帰っても結局は上っ面を撫でたにすぎず, 生活から体験してかからぬ限り日本のことは分かるまい」と考えた周作人は, 日本人を妻に迎え, 「衣食住ともに全くの日本式の生活を送っていた」(周 p. 334) 徹底ぶりである。

周作人は終生日本のことを第二の故郷と見て, 日本の生活や情趣に深い愛情を注ぎ理解を示した。「日本管窺」などに代表される一連のエッセイはまさしく前出の竹内好が認めたように「中国人による日本論や日本人論の白眉」の一つである。日本の衣食住だけでなく, 縁日祭り, 大衆伝統芸能, 民俗芸術に満遍なく向けた周作人のまなごしを, その膨大な言説のすべてを列挙し集約するのは, 紙幅の制約もあり不可能である。が, 今日の中国人観光客の訪日感想と比べて共通したキーワードを点検すると, おおよそ周作人が「東京を懐う」に述べたように, 「例えば清潔なこと, 礼儀正しいこと, 洒脱なこと」(周 p. 284) などが, それである。

一方, それまで日本に向けてきた中国知識人や留学生のまなごしと比較すると, 生活における両国の差異を周作人が鋭敏に捕捉し, それらをよりの確に表現できた理由は, 彼の文学者としての豊かな感受性と実体験を伴う鋭い観察眼に求めることができる。また「越の人の性分と習慣」から地理的気候的に近い日本により親近感を持ちやすく, 一般的に淡泊無味と思われていた日本食でさえ難なく適応できたのがその証拠だと本人も説明している。(周 p. 281) しかし, 「日本を日本のままに受け入れようという」日本と向き合うときの彼の姿勢の形成, すなわち彼の「日本を見る目」の枠組みの構築において少なくとも次の二点が常に大きく機能していると考えられる。

一つは周作人が自ら論じたように, 「天朝大国の中国は日本文明の範である」という中国人の従来からの自惚れ意識と, それとほぼ表裏をなす自尊心が傷つけられた後によく見せる過剰反応に対する自制である。

中国人には一種の自惚れがあって, 外国文化の研究にはあまり向いていない。少数の人々はそいつを抑えてまずは公平な観察ができるかもしれないが, それでも自尊心を傷つけられれば, 冷静ではいられない。(周 p. 62)

周作人は日中両国にかつて師弟関係が存在し, 文化に同一性が見られることを否定しないが, あくまで日本文明の固有性を重視し, 公平にそれを研究しなければならないと主張する。

中国はその独特な地位から特に日本を理解する必要性と可能性とがある。ただ事実はさにあらず, みな日本文化を軽蔑し, 昔は中国を, 今は西洋を模倣しているだけで一見の値打もない, くらいに心得ている。なるほど日本の古今の文化が中国と西洋に取材していることは本

当だ。しかし一通りの調合を加えてそれを自分のものとしたところは、あたかもローマ文明がギリシャより出て自ら一家をなしたのと同じである。(日本の成功はローマ以上かもしれない。)したがって日本に固有の文明があるといっても何ら差し支えはなくそれは芸術と生活の面において特に顕著である。(周 p. 59)

4.2 同文同種への幻想に対する否定 — 日本語は外国語である

もう一つは、上述の認識と関連して、従来自明の理として受容され、日本や日本人またはその文化を眺めるときに、中国の知識人の誰しも当たり前のように思っている「同文同種」という幻想に対して投げかけた深刻な疑問である。「中国と日本は同文同種などという間柄ではないが、文化の交流があったお蔭で、さすがに思想はいくらか理解しやすく、文字も習いやすい方ではあるから(もっとも反面では、日本文の中になまじ漢字の混じっていることが、中国人の透徹した日本理解を妨げていると私は思うのだが)」、(周 p. 62)「日本文は結局外国語であって、間にたくさん漢字が混ざっているものの、実際には大して私どもの足しになるわけではない。」(周 p. 212)「日本を理解しようとせぬ中国人の、日本文化は研究に値しないとか、日本語などは三月もあれば熟達できるとかいう、浅薄な誤った意見はぜひ改める必要がある。」(周 p. 71)

周作人自身も留学当初、大半の留学生と同様に、西洋を学ぶために、主に英語の本を読みふけており、日本語習得の必要性をそれほど感じなかった。前述のように、日本語の勉強にも本腰を入れるようになったのは、通訳をしてくれた兄の魯迅が帰国し、彼自身が日本人の女性と結婚した後である。

もし研究を掘り下げようと思うならば、言葉にはそれなりの生命があることを知り、それに対し何分かの愛着と理解を抱くまでになる必要がある。そうなるには、根本的に口語から入り、さらに名家の書いた文章をたくさん読んで初めて、本当にわかって来るのであって、規則を何十条か覚え社会科学書に数冊目を通した程度で到達できることではない。そこで次の意見はこうである。日本語を習うには精々悠長に構え、なるべく多くの時日かけることが必要で、やむをえぬ場合はともかく、くれぐれも速成を求めるべきではない(周 p. 156)。

周作人のこのような議論は、実に梁啓超以来、留学界に流布されてきた日本語速成可能論に対する糾弾であった。1900年に刊行された梁啓超の『和文漢読法』は「少しも頭を使わずに莫大な成果を上げられる」ということで、日本語の速成法を伝授する教科書として、当時の留学生に大好評を得ていた。「学者これを読めば、直ちに俄頃の脳力を費やさずして得る所已に無量なり」とされたこの本は、「初めて日本語を習う者に、いきなり中国語の語法に従って返り読みをさせてみたところ、十中八九通じた」という作者自身の経験に基づき、「僅かに一日夜の力を以て」成されたものである。「完璧ではない」と作者自身も認めたものの、とにかく速成を希望す

る留学生の多くはそれに飛びついた。梁啓超はその学習効果について「日本語を学ぶ者は一年にしてなるべし。日本文を作る者は半年にしてなるべし。日本文を学ぶ者は数日で小成し、数月で大成する」と嘯いていた(古田島洋介 2008)。しかし、「一年たっても日本人教習との会話交流ができず、筆談を余儀なくされた」(李海 2010)という利用経験者の後日談を見れば、この速成書は日本語の読解力の向上に機能するかもしれないが、会話による交流促進にまず向いていないことがはっきりと分かる。

「同文」にしがみついてなるべく最大限に自身の漢文の力によって日本語を理解しようとした。利用者のこのような気持ちはわかるが、「その結果、どんなものでもいち早く日本語から中国語への移入を目的とするあまり、消化不良で、生半可な理解を伴う」(李海 2010)弊害は避けられなかった。

周作人もこの本を読み、恩恵を受けていたとされるが、「今日の日本文は、おそらく法律関係が一番読みやすいだろう。次は社会、自然科学で、文芸が一番難しい。さすが仮名一本槍の文章こそないが、なにしろ市井の細民間巷の婦女のことを書いているので、口語から入らなければ理解しかねるわけだ」(周 p. 208)というように、彼は、日本で西洋の諸学問を学ぶ上で漢文に基づく日本語の速成はやむを得ない選択だとしても、生身の日本人、等身大の日本を伝える文芸などに接するとき極めて限界のあるものと認識していた。『和文漢読法』のような存在は「一方で日本語の習得を奨励しながらも、一方では誤解の種をまき日本語をひどく易しいものに思いこませる、といった二つの事態」(周 p. 208)が続くことを招いてしまったと、周作人は速成法の弊害を批判している。

注目すべきは周作人が口語の重要性を強調した点である。口語こそ「同文」の束縛から自由になる、漢文の対角的存在であり、日本の「今日」、すなわち大衆が生活する「俗の世界」への理解につながる道であり、生きている言語である、と周作人が考えている。速成法への批判は裏を返せば、周作人の日本に向けるまなごしの立場の特殊性を明らかにしたものである。すなわち法政速成が大きな時代の潮流をなしていた中で、周作人はあえてこのような功利観念と距離を置き、「彼自身の性格や好奇心と古を思う精神から日本文化と西洋文化との違いの根源に注目し」、「一種の純然たる主観的な鑑賞の態度で」(李景彬他 1996)日本を眺めていた。

数十年来、日本に留学したものは少なくなかったが、大抵学んだのは日本が西洋より受け容れたものであって、日本自身のものでなく、日本の歴史地理文学美術宗教等、真の日本の精神文明は、従来これを訪ねる者がなかった。それ故日本は今もって一個の謎に近く、したがって中国の日本に対する毀誉はことごとく的外れている(周 p. 93)。

日本語や日本文の研究を疎かにするのは当時の留学生の間では一般的な傾向として表れている。その理由は後に詳述する戴季陶が自著『日本論』(1928=1972)で次のように分析する。「一つは英語なら帰国してから役に立つが、日本語や日本文は役に立たない、というのである。もう一つ

は、日本そのものに研究価値がない、何故なら、中国やインドやヨーロッパから輸入したもの以外に何も無いからだ。」(p. 7)「獵官組」という浅薄な一群が大見得を切った中で、日本の生活文化の「素朴な美」に対する認識、直覚または純真な情熱を示した周作人の存在は清末留日学生の中でまさしく異例である。

しかし、周知のように、帰国後、周作人はのちに毛沢東によって「中国文化革命の主将」であり、「文化戦線上の民族英雄」と絶賛された兄魯迅と喧嘩別れになった。その後さらに日本式の耽美主義に立ち戻っていくにしたがって、革命文壇とも疎遠になり、拳句の果てに戦時中日本の傀儡政権の要職に就いたため、戦後「漢奸」として投獄された。新中国成立後、周作人は釈放されたものの、20数年にわたる蟄居を強いられ、失意の中で生涯を閉じた。周作人は日本では戦前からその著述が注目されていたが、中国近現代文化史においては、長い間ある種タブー的な存在であり、近代日中関係史において「親日家・愛日家」が迎えるべき悲劇の結末を示す典型的な人物ともいえよう。周作人の文学者としての功績を再評価する機運は90年代に入ってから文学界で高まるようになったが、魯迅と正反対に位置する「漢奸文人」という汚名は一般大衆のイメージには依然として根強く残っている。

周作人はそれまで大抵の中国人留学生に見落とされたところ、すなわち政治と無縁の日本自身のものに迫り、真の日本の精神文明が存すると思われる歴史地理文学美術宗教に目を向けてきたが、「漢奸」の汚名を着せられたために、結局のところ、彼の日本論や日本人論も政治の犠牲となり、現代中国人の日本に向けるまなごしの形成過程からすっぽりと抜け落ちていた。今日に至っても多くの中国人にとって「日本は依然として一個の謎に近い存在」であるが、それは、周作人の日本論が、彼自身が「民族の裏切り者」と断罪されたことで長らく封印されてきたところに一部理由が求められよう。

5. 日本に向ける「相反する」まなごし — 戴季陶, 蔣百里の日本論

5.1 知るべき他者としての日本 — 戴季陶の『日本論』

1928年に刊行された『日本論』は民国期きっての日本通として知られた戴季陶の著作である。この本は「数ある外国人の日本に関する著作のどれを取ってみても、決して引けをとらない、すぐれた作品」であり、三白眉の中でも屈指すべきものと竹内好によって絶賛されている(戴 p. 245)。

『日本論』は戴季陶が1927年に国民党から日本に派遣された際に執筆したもので、翌年上海で出版された。当時の田中義一内閣は孫文が指導する国民革命に対して決して好意的ではなかった。国民革命についての日本側の理解を求めることが戴季陶の渡日の使命であり、本書執筆の最大の目的は田中内閣の対中干渉的政策を批判するところにあると一般的に考えられている。

24章から構成される『日本論』では、戴季陶はまず中国人が日本問題を研究する必要性を唱え、うえ、「神権の迷信と日本の国体」からスタートし、近代日本の出発点であった明治維新に

対する分析を展開しつつ、日本人の性格、思想、風俗習慣、国家と社会の基礎などを明らかにしながら、「国家主義の日本と軍国主義の日本」に批判の矛先を向けた。戴季陶は本書の中で日本人の信仰力、武士道の倫理性、尚武の民族性を高く評価しつつも、そのいずれも衰退し社会全体が退廃的になった結果、日本は国家主義、軍国主義、帝国主義に陥っていくことを鋭く指摘した。

幼少のころから秀才の誉れが高かった戴季陶は科挙試験に失敗し、1905年に日本へ自費留学し、1907年に日本大学専門部法律科に入学し、二年後に退学し帰国した。江蘇地方自治研究所の教官を経て上海に拠点を移した戴季陶はしばらくジャーナリストとして活躍したが、優れた文才及び高い日本語力が評価され、1912年より21歳の若さで孫文の秘書兼日本語通訳に抜擢され、孫文と日本とのパイプ役を務めていた。孫文の死去後、国民政府委員、考試院院長など国民党の要職を歴任し、国民党の理論家としての評価も高かった。抗日戦争に勝利したものの、内戦で敗退する国民党の不甲斐なさを目の当たりにした戴季陶は失意と憤慨の中、新中国が成立した直前の1949年に広州で自ら命を絶った。

もとより、国民党の元老であり、民国期の対日政策の策定者として活躍していた戴季陶の対日観や対日認識は決してこの一冊の本によってすべて網羅的整合的に説明できるものではない。戴季陶についての研究は日本でも多数行われており、『日本論』についても様々な角度から分析されてきている。激動する当時の国内外状況や戴季陶の政治行動や対日認識の転換についての分析は先賢たちの知見に譲るが、ここでは本稿の関心の的、すなわち本書に現れた、日本に向ける戴季陶のまなごしの特徴だけを取り上げておくことにする。

第一に、時の田中内閣の対中政策に痛烈な批判を加えながらも、あくまで内省的な態度を取り、自制的かつ冷静的に日本分析を展開している点である。『日本論』の前半は8年前の戴季陶の自作『わが日本観』を改作したものである。これに関連して、『日本論』に序文を寄せた戴季陶の同士、民国期の政治家の胡漢民曰く「(それまでの戴の日本観は)主観が勝ちすぎていた」、「ことさら相手を悪く言おうとして、相手の長所まで短所としているところがある」(戴 p. 187)。これに対して、戴季陶は「今度書き改めた『日本論』は、冷静な研究的態度を貫いて、前のような偏見からくる欠点を取り除いたつもり」だと述べている(戴 pp. 187-188)。もとより、「三十年前に黄公度(黄遵憲)先生があらわした『日本国志』という本以外に、日本を専門に取り上げた本は見たことがない」(戴 p. 5)と黄遵憲の存在を明らかに意識している文言からも、本書で戴季陶が貫こうとするスタンスがあくまで「対等」というところにあることが読み取れる。その上、自分自身の日本論について戴季陶はあくまで「意余って力足りず」のものとし、「ただ十年余りにわたってごく皮相な、また断片的なもので」あり、感じたものの一端を述べようとするものに過ぎないと述べ、謙虚な姿勢を全面的に見せている。(戴 p. 6)

第二に、「自大思想」の弊に陥らないために、中国人が日本に真剣なまなごしを向けるべきだと喝破した点である。「対華二十一か条」以降、中国国内で蔓延する一切切を取り合わないという排日的風潮について、戴季陶は「思想における鎖国」「知識における義和団」も同然だと

諄々と戒めている。本書の中で戴季陶は「彼ら（日本人）の良しあしではなく、彼らは『なに』であるかは、我々が今最も知るべきものである」（戴 p. 252）と問題提起し、それを解決するためには「日本人の性格はどうなのか。思想はどうなのか。風俗習慣はどうなのか。国家及び社会の基礎がどこにあるのか。生活の根拠はどこにあるのか。これらすべての点にわたって、真剣に研究しなければならない。日本の過去が分からなくては、日本の現在がどこから来たのか、わかるわけがない。現在の実情がわからなくては、将来の動向を推察することはできない」（戴 p. 9）というように、日本と対峙する際、向けるべきまなごしの方向性と必要性を具体的に提言した。

第三に、何より重要なのは、『日本論』に現れた日本に向ける戴季陶のまなごしは政治家にありがちな功利的な視点を乗り越え、思想や信仰など日本人の内面的精神世界にも及ぶ、多岐にわたるものである。本書では戴季陶は特に日本文化や日本人の審美意識を取り上げ、中国人のそれらと比較しながら、時には痛烈な中国人批判を辞さずにしてまで日本人・日本文化を高く評価した。「日本の審美の程度は、外の国民に比較して高尚且つ普遍なりと言ひ得る」。「日本人の芸術生活は真実にして彼は芸術の中に彼の真実にして虚偽なき生命を体現しうる」（戴 p. 159）というように、日本文化や日本の美の世界に対して戴季陶は最高級の賛辞を惜しまずに送り、その表現の数々から日本に対する深い愛情すら感じられる。

自費生として渡日した戴季陶は、決して余裕のある留日生活に恵まれなかった。日本であえて法政を専攻に選んだことは、彼が留学に立身出世のチャンスを見出したからだと考えてもさほどの外的れの議論ではないだろう。しかし、日本大学に進学し、しかも留日中に日本人と紛うほど高度な語学力を習得でき、日本の新聞雑誌等において日本語の小説、随筆、詩歌を多数発表したなどの点から考えると、留日中の戴季陶は嚴安生がいう「勉強組」に分類されて当然な人物であろう。留日中の戴季陶はむしろ運動組の中国人留学生と一定の距離を置き、政治活動にも大した興味を示さなかった。学業を半ばに帰国した理由は革命に身を投じようとするよりも、経済的な困窮や失恋による精神的な苦痛によるものが大きかったとも言われている⁵⁾。

周作人のエッセイとは異なり、1928年に刊行された『日本論』はかつての留日学生が抱く日本に対するノスタルジアが投影されたものと言うより、戴季陶の成熟した政治家としての卓見が見事に披露された労作といえよう。日本語の習得に絶大な労力を投入し、日本人との触れ合いを大事にしながらか日本社会へ深入りした5年に及ぶ留学生活によって、「戴自身に、日本人の文化や民族性をその内側から総合的に認識し、日本人の価値観を把握し表現する基礎が形成され」（望月敏弘 2011）、中国人のそれらとの比較に必要な自他構造の礎が内側から形作られたと言っても決して過言ではない。それこそ、『日本論』に現れた戴季陶の日本に向けるまなごしの公平性を担保するものであり、早期の著述『わが日本観』に幾らか内包されている「自大思想」を自ら自戒し、しかもそれを最大限に相対化できた理由でもあろう。

戴季陶の『日本論』がどのように中国人に読まれてきたかは昨今の識者の評価を見れば最も手っ取り早いと思われる。前出の胡漢民は次のように述べる。「およそ一つの歴史民族を批評す

る眼目は、その民族の善悪を云々することではなく、その民族がいったい何であるか、なに故にかくあるかを明らかにすることにある。季陶先生は本書において、完全にこの態度から出発している。したがって、彼の立場は日本に対する弁護人であると同時に裁判官である。この弁護人兼裁判官は公平無私、賄賂を受けつけずに、力による圧迫にも左右されない。」(戴 p. 186)

日本における戴季陶研究の第一人者、嵯峨隆(2002)は次のように指摘する。「『日本論』は、同時代の中国人による分析としては群を抜いた存在であり、その水準の高さは今日の中国においても、思想に対する批判とは切り離して好意的に評価されている」。しかし、中国大陸の歴史教科書において戴季陶が長い間「国民党反動派中の右派」であり頑固な反共者として断罪され、「思想に対する批判と切り離して」その日本論が好意的に評価されるようになったのはむしろ21世紀に入ってからのことである。台湾においても戴季陶は党国の元老として知られ、その悲運の死を嘆かれてきたが、続刊されてきたとはいえ「(『日本論』のような)傑出した研究成果及び第一流の知日家としての事実」は大陸同様忘れ去れた時期が長かった、とも指摘されている(蔡亦竹 2019)。

21世紀に入って『日本論』は中国大陸で複数の出版社によって出版された。しかし、指摘しておきたいのは、そのいずれも戴季陶の反共反動的な一面を注意せよとの解説文が丁寧が付されている点である。その意味でいうと、「大反動派」による90年も前の日本論がどこまで今日の中国一般読者の対日観に影響を与えているかについては、より多層的な解析も必要である。『日本論』は2013年に「民国学術文化名著」の復刻版と称して岳麓書社によって再度出版された。識者の推薦の言葉として添えられているのは、文化人の李建軍の書評から抜粋された一言である。曰く「『日本論』は確かに平和的に書かれており、読む人に血がたぎるような思いをさせない。しかし、この本を通して、我々は勢いが際立った日本がみえると同時に、高慢で横柄な日本もみえた。」(李建軍 2005) 李の書評は、戴季陶が主張する、日本と向き合う際に持つべき平和的省察的まなごしに共感するだけでなく、中国人に対する戴季陶の内省的批判にも触れている。しかし、上記の一言だけがあたかも大多数の中国人読者の感想を代弁するかのようにはかり出され、前面に躍り出ている。一つ言えるのはこれと同じ目線で読むならば中国人読者の脳裏において再生産され続けうるのは、おそらく日本の傲慢で横柄なイメージのみであろう。

生涯を通してみられる戴季陶の日本観は、「愛着から敵意に転じ、さらに提携、対立、幻滅、非敵と二転三転した」(中島岳志 2011)と指摘されているが、『日本論』においては、戴季陶は中国人にとって日本は未知の部分の多い他者と指摘し、帝国主義にひた走る日本に幻滅をしながらも、少なくとも日本を不倶戴天の敵としてみなしていなかった。そこに現れた戴季陶の対日観はまさしく次の二点に集約できると言えよう。すなわち「『知日』でありながら決して『親日』ではなかった。『反日』でありながら決して『嫌日』ではなかった」(村田雄二 2015)。その繊細な対日感情及び複雑なバランス感覚を今日の中国人一般読者がどれだけ体得できるかは頗る謎であろう。

5.2 蔣百里の『日本人——一外国人の研究』

師範、法政と陸軍士官の三つの流れが清末の日本留学の大勢を占めている。その中で特に陸軍士官学校を卒業した人々の多くは後の日中戦争で日本軍と死闘を繰り広げていた。国家民族の存亡をかけて日本を敵に戦ったこれらの人々は本来日本を敵視する中核的な存在と考えられがちだが、この一群の日本に向けるまなざしには相反するものも存在していた⁶⁾。

しかし、その一群が残した日本についての記述は体系的なものがなく、後世の中国人の対日観に与えた影響も少ないと考えざるを得ない。その中でほぼ唯一今まで読み継がれているのは「天性の兵学家、また天性の文学家」と称えられた蔣百里の『日本人——一外国人の研究』である⁷⁾。

本書は日本ではほとんど知られていないが、日中戦争期の中国では毛沢東の『持久戦を論ず』と並列して論じられ、「どちらも抗戦初期の暗黒の日々の中で人民大衆の『精神的支柱』になった不朽の名作」(蔣 p. 300)であり、いまだに戴季陶の『日本論』と並べられ、中国人の「日本を知る」この上ない好著として広く読まれている。

蔣百里の『日本人——一外国人の研究』は最初1938年8月下旬から『大公報』漢口版に連載され、大いにセンセーションを巻き起こしたという。『大公報』の販売部数は突如として一万部に増加し、読者は毎日夜明けとともに、新聞が刷り上がる前から発行部の前に行列して、一刻でも早く読みたいと待っていた。連載終了直後、単行本として刊行されたが、再販増刷を繰り返しても「飛ぶように売れ、瞬く間に十余万冊が売れ」、一大ベストセラーとなった(蔣 p. 299)。

いうまでもなく20世紀の30年代から45年までは日中は敵対関係にあり、中国国内の抗日運動が熾烈さが増す中、日本に関する調査や研究が多数行われ、研究成果も大幅に増加し、内容も豊かになった(王敏 2009)。しかし、これだけ普通の民衆の目に留まり、熱狂的に支持されるものは少なかった。当時の状況を見れば、本書はもっとも広く中国人の目に触れた「日本人論」といえよう。

『日本人——一外国人の研究』は日本の自然、地理、風土、人種の特徴から始めて、日本の歴史、政治、経済などの分野において多くの代表的人物の経験を広く比較分析し、「序文」と「本書成立の物語」を除いて12章から構成されている。しかし、内容は多岐にわたるものの、本書は合計1万7千字ほどしかなく、むしろ小冊子といった方が妥当であろう。視点こそ多様でありながらも、学術研究書に求められる堅実な論証プロセスは一切省かれ、結論だけが提示される、実に明快な構成となっている。

蔣百里は日本だけでなく、ドイツにも留学し軍事学を学んだ。中国の近代史上に稀に見る東西両方の事情に通暁する兵学家であり、文学家でもあった。本書を出す前に、留日中の蔣百里はすでに『浙江潮』という高名な雑誌を発行し、活発な文筆活動をしていた。帰国後彼はさらに『欧州文芸復興史』、『軍事常識』、『国防論』などの著作を世に送り出し、文壇と軍事界においてともに名声をほしいままにしていた。

蔣百里は不世出と褒められるほどの俊才で、帰国後日本人と結婚し、「毎月日本の新聞を定期

購読し、帰国後三十数年になってもいまだに一日も欠かした日はなかった」(蔣 p. 303) という記述を見れば、周作人ほど日本の生活文化に心酔していなくても、当時屈指の日本通であることはほぼ間違いないであろう。しかし、本書は形式や内容や客観性のどれをとっても、「研究」とは程遠いものである。ではなぜ学者肌で理論家として知られた蔣百里はあえてその形を選んでいわゆる「不完全な日本観」を大衆に披露したのだろうか。

5.3 敵としての他者 — 戴季陶と蔣百里の日本論を比較して

『日本人 — 一外国人の研究』は1937年に蔣百里が蒋介石の特使としてドイツを訪問したころに、ベルリン郊外の静寂な部屋で執筆し、帰国後に修正を施して決定稿を作成、『大公報』紙上に発表したものとされる。文中の表現を精査すれば、10年前に刊行され、一世を風靡した戴季陶の『日本論』を少なからず意識して書いたものとも読み取れる。しかし、戴季陶の『日本論』のように重厚長大の著作にせず、「幾分深さが足りない」という後世のありがちな批評を恐れず、蔣百里があえて自著を新聞連載という「軽薄短小」な形にした理由は、恐らくほかでもなくセンセーションそのものを狙っていたのではないかと筆者は考える。本書は、蔣百里が軍事戦略家としての才能を発揮し、周到なメディア戦略を構想していた成果だとも考えられる。当時の日独などで戦時宣伝工作が盛んに展開されていた。それらを目の当たりにしてきた蔣百里が新聞の宣伝効果に目を付けたのは決して突飛な発想ではなかっただろう⁸⁾。

第一に、すでに既往研究に指摘されているように、蔣百里は『日本人 — 一外国人の研究』というタイトルに合わせて「この文章は、ベルリン郊外に在住する仙人のようなドイツ老人の筆記したものから要約した」(蔣 p. 327) ものと称して、あえて署名せず連載を続けた。内容が複雑に入り組んでいる寓話を入れ混ぜ、「水滸伝の文体」でその神秘性をおおるような書き方は逆に読者や文壇の興味関心を引き、結果的にこれが大当たりだったという(蔣 p. 300)。「一外国人の研究」をサブタイトルとして付けた蔣のもう一つの目的は、戴季陶のように「日中」という自他構造を内側から眺めるのではなく、あくまで第三者＝西洋人の視点(を装うこと)で「他者＝敵」としての日本の罪を列挙し、説得力を獲得しようとするところにある、とも考えられる。

第二に、これまで戴季陶の『日本論』にみられる日本との比較を通して中国人の自省を促すという自制的な視点を取らず、蔣百里は『日本人 — 一外国人の研究』において終始正面から目いっぱい皮肉を込めて日本のすべてを非難する。彼の意図は言うまでもなく専ら国民の士気を鼓舞するところにあると推察する。戴季陶は『日本論』において、「中国やインドやヨーロッパから輸入したもの以外に何も無いから」、「日本そのものに研究価値がない」という従来の中国人の日本観を「自大思想の弊に陥っている」(戴 pp. 6-7) ものとし、痛烈な批判を加えた。こともあろうに蔣百里は戴季陶の調子のままで反論を展開した。「日本国民はもともと外国人を崇拜しているが、これは数千年来の遺伝である。急にあらためられるものではない。もしも日本の文明から欧米から輸入した機器と科学を取り去ったら、中国とインドから輸入した文字と思想以外に、いったい何が残るだろうか。」(蔣 p. 323) と。

また、「日本人は『中国』というテーマを解剖台に乗せ、すでに何千回となく解剖し、また試験管に入れて何千回となく実験しているのだ」（戴 p. 6）という戴季陶の指摘に対して、蔣百里は「しかし細密すぎるが故に、マクロに把握すること、普通に把握することをかえって忘れてしまうのである」（蔣 p. 323）とし、「日本人はまた中国人の人物を研究する。彼らの伝記と行動とは、感興のある記録となっている。しかし、日本人は中国地理の統一性と文字の普遍性を忘れて、武力で5000年の歴史の力を改変し、中国を分裂させようとしている」（蔣 p. 324）から、それはむしろ「眼前の（いずれ失敗につながる）悲劇の源」の一つと論断する。

第三に、綿密な考証に抛らずに次から次へと出される論断は、すべて文末の感情的なスローガンに結晶させるための布石とも考えられる。「勝也罷、敗也罷、就是不要同他講和！（勝つても負けても日本と講和してはだめだ！）」（蔣 p. 327）という本の末尾の言葉は、億万の中国人の心の声を述べ、衆人の口に伝承され、たちまち抗戦時期の名言となったのである。強調しておきたいのは、それに先立って人口を膾炙してきた蔣百里の名言はもう一つある、ということである。その前年（1937）に出版された蔣百里の『国防論』の扉に書かれた「万言千語、就是告訴大家，中国是有弃法的。（万言千語を以て皆さんに伝えようとするものはただ一言のみ、すなわち中国には（日本に勝つ）手段がある）。⁹⁾」という一文が、それである。民族存亡の危機に瀕しているからこそ、言葉を弾丸にして中国人のナショナリズムを最大限に刺激する必要がある。これこそ蔣百里が「天性の兵法家と文学家」としての自身の才能を遺憾なく表出するために考え出した奇策でもあろう。

小冊子とはいえ、『日本人——外国人の研究』は蔣百里の「数十年にわたる日本研究を積み重ねてきた結晶なのである。」そのため、今日それを読み返しても「文章に無駄はなく簡潔であり、豊富な資料と解析能力があってこそ可能な描写がなされている」（蔣 p. 299）と日本の学者もそれなりに本書を評価している。もとより、蔣の日本人論は戦時下における記述であり、記述の対象としての日本はそもそも対話の相手として存在するのではない。そうした第三者と称して「他者／敵としての日本」へのまなごしは必然的に戴季陶のそれと比べてより強烈な敵意を帯びている。その敵意が嫌われたのか、日本非難に終始したこの小冊子は竹内好の眼鏡にかなうこともなければ、つい最近まで日本に紹介されたこともなかった。

6. 結びに代えて——中国人訪日観光客のまなごしの「古層」と「深層」

6.1 「日本四書」が意味するもの——機能する「古層」と機能せざる「古層」

本稿では清末の訪日／留日経験のある知識人による日本論／日本人論を今日の中国人の日本に向ける「観光のまなごし」を形成させるうえで最も基底にあるテクストとして注目し、そこに現れたものを中国人の原初的な対日観、すなわち「観光のまなごし」の古層として捉え分析を加えた。中国では「日本に対する理解不足」が叫ばれて久しい。急速に台頭する訪日観光ブームとあいまって、2006年にいわゆる「日本四書」が一般向けに刊行され、中国国内では「日本人の民

族性を洞察する四大テキスト」として推奨されている。しかし、注目すべきはその前年、すなわち 2005 年はまさにこの十数年来、中国での反日ブームが最高潮に達した年でもあった。新渡戸稲造の『武士道』とベネディクトの『菊と刀』以外に、「日本四書」に選ばれたのは戴季陶の『日本論』と蔣百里の『日本人』である。その選書基準は実に本稿で取り上げてきた日本論の今日的意義を示唆的に提示している。

黄遵憲を除いて、政治家としての戴季陶、文学者としての周作人、軍事家としての蔣百里の共通点とともに清末の「真面目な」留学生であり、日本語の文献を使いこなす力と、直接その社会に入り込んで、実地の体験を身につけるなどの点においても大差ないからこそ、それぞれ知日家として後世から見ても「魅力」のある日本／日本人論を残したと思われる。もとより著述に示された著者の対日観は三者三様である。ごく単純に図式化すると、周作人は知日だから「(長く考えた挙句) 親日」に徹し、戴季陶は知日だから「(日本を批判するためにも) 日本をより知るべし」と力説し、蔣百里は知日だから「(日本に勝つために) 反日を徹底せよ」と主張している。さらに踏み込んでいうと、20 世紀 30 年代にも、今日の中国人の対日観の典型的な態度を示すキーワードがすでに彼らの著述を通して出そろっている。すなわち、知日、親日、反日がそれである。言い換えれば、今日まで読み継がれている彼らの著述は、中国人の日本に向けるまなごしを形成させるうえでテキストとして機能する古層でもあれば、日本を眺め、解説するうえでの視点や文法、すなわちコードとして機能する古層でもある。

しかし、前述のように、「対等なまなごし」を唱える黄遵憲の『日本雑事詩』『日本国志』は難解な漢文で著されており、知識人向けの対象限定の学術書として一般読者に敬遠される存在である。一方、周作人の「親日的」エッセイは長らく漢奸売国奴の「媚日」言説として解説され批判されてきている。その両者が大衆向けの選書から外されたのは決して不思議ではない。それより、反共反動派として批判されてきた戴季陶の『日本論』が入選されたことに実に強いメッセージ性が感じられる。つまり、黄遵憲を代表とする清末以来の知日派の対日観を通底するもう一つの古層的な認識、すなわち「中国人寡知日本者也」が、30 年後に戴季陶にバドンタッチされたものの、21 世紀に入ってようやく市民権を得て中国人一般読者の視野にも登場したといえる。しかし、付言しておきたいのは、今日の一般中国人にとって「親日＝媚日」と「反日」の間に、「知日」という「第三の研究的態度」が存在する余地が認められつつも、軍国主義の日本に対する痛烈な批判という前提が依然として必要とされている。

「中国の知識人が現在の日本を論じる際も、相変わらずよく『菊と刀』と『日本論』を引用している」(許知遠 2018) 現実に限って見れば、古層としての戴季陶の対日観はあたかも今日の知識人、すなわち新しい時代のテキスト生産者にも評価されているように見える。しかし、「日本社会に内在する複雑性は我々の視野にめったに入っていない。日本は高度にイデオロギー化された敵か、模倣をすべき隣国か、の両者択一的な存在とされてきたが、その日本は一体何なのかについて我々は依然として興味を持たない。」(許知遠 2018) という同じ評者の現状判断を煎じ詰めれば、戴季陶が 90 年も前に出した「彼らは何であるか」という巨大な質問はいまだに満足な

答えが得られていないし、戴季陶が警告していた、「日本についての無関心」は今日に至っても改善されていないということになり、古層とはいえ戴季陶の対日観は一般民衆どころか多くの知識人の日本に向ける視線にもいまだに部分的にしか機能していない。

6.2 『日本人論』が意味するもの — 危惧すべき「古層」

「日本四書」に入選されながらも、蔣百里の『日本人論』は必ずしも今日の知日派の知識人が日本を論じる際に用いる主要な視点にはなっていない。しかし、まさにドムナック (Jean-Marie Domenach, 1922-1997) が「政治宣伝の定則と技術」について指摘したように、知識人は条件付きの主張をしがちだが、それでは大衆の信用は得られないため、細部を無視した断言こそが有効である。中国人読者が蔣百里の『日本人』を読んでネットに書き込んだ感想を点検すると、「勝也罷、敗也罷、就是不要同他講和！」はいまだに「最も元気づける」言葉として大書され称賛されている。このスローガンは、戦時中の中国民衆の日本への敵愾心を最大限に引き上げようとする蔣百里が自らの主義主張を「大衆的用語」に書き換え、断言したところに異常な生命力を得ることになったと思われる。

しかし、それが今日においてもネット上で唱えられ続けていることは、中国人の対日観の形成において、このような「他者との対話を真っ向から否定する」「古き」標語的言説を意図的に消費しようとする環境、及びそれらを再生産するプロパガンダ的な思考回路が平時の今に至っても機能していることを示唆している。その意味でいうと、このような戦時中に発せられたスローガンは、すでに中国人の対日観の底層に沈殿したとはいえ、時折大衆のナショナリズム的まなごしを刺激する結晶として浮上することも十分ありうる。もとよりこれは何も中国だけに存在する状況ではない。深層潜流とはいえ、時の状況やメディアやネット言説に刺激され、一気に増幅しかねないこの種の「執拗低音」こそ、中国人観光客の日本に向けるまなごし、または日本人の中国に向けるそれらに大きな変調をもたらす古層として最も危惧すべきであろう。

6.3 訪日中国人観光客のまなごしの「深層」

6.3.1 「自負心」と「自大意識」

韓国人研究者の姜明求と南恩瑛 (2017) は中国人観光客の韓国に向けるまなごしを、①「愛国的・発展主義的まなごし」、②「消費主義的・コスモポリタンのまなごし」、③「解釈的・自己省察的まなごし」と大きく三つに分類した。

①に関しては、「韓国の発展した姿に対する肯定的な評価や憧れ」と中国文化と伝統に対する自負心」が共存することによって、愛国的・発展主義的まなごしには両面的な性質が付与されている。

②に関しては、商品の価格と品質に対する信頼、目的地へのアクセスの良さ、最新の流行に対する期待感が消費主義的まなごしを生産する原因とされるが、その基底に存在するのは、「中国人は過去に豊かだった大国の国民として、近代の歴史的屈辱や発展の停滞を超え、再び経済力

を持ち、自由に海外旅行をしながら買い物ができるのだという自負心と満足」であると指摘されている。

③は観光地の内側の姿を覗くまなごしであり、目的地の特徴を自分の論理で説明し解釈しようとするまなごしであると定義され、一般の観光客よりも目的地に対するより豊富な知識や国内外の観光経験や、表層的な特徴や姿ではなく、その深層まで観察する能力が必要とされ、偏見を持たずに何でも直接体験をしようとする能動性も必要不可欠とされている。(pp. 79-92)

紙幅の制限で韓国の状況との詳細な比較を省くが、訪日観光ブームに相まってネットをにぎわす、一般中国人観光客による日本人や日本文化についての言説空間を概観すれば、そこで機能しているまなごしは韓国で観察されているものとはほぼ同様で、重層的相互結合的でありながらも、①と②が主流を占めていることが明らかになる。

あえて前述の清末留日学生の対日イメージと比較すると、21世紀の中国人訪日観光客は「爆買いをする成金」と揶揄されながらもまた一世紀も前に日本にやってきた留学生と同じ感嘆を発する。「日本の政治は善なり、学校は備なり、風俗は美なり、人心は一つにある」(任達 2015)と。一方、中国ですでに失われたものの、「中国の文明の神髄を得た純然たるもの」を日本で発見した際、感じ入り、興奮し満足を覚える中国人観光客の姿は百年前の清末留学生のそれらと重なっても何も違和感はないだろう。

韓国の学者によってキーワードとして使用されている「自負心」はむしろ控え目な表現である。改めて指摘するまでもないが、ここの「自負心」はすなわち戴季陶が『日本論』で再三にわたって戒めている中国人の「自大意識」に通底するものであり、黄遵憲が提唱した「対等なまなごし」の不在による結果ともいえる。一方、日本に対して発せられる「百年たっても変わらない」感想自体は、百年たってもなおも追いつけないことに感ずる挫折感と表裏一体のものであろう。その複雑な感情は、まさしく中国における日本研究の第一人者とされる孫歌(1955-)が指摘するように、日清戦争以降、中国人の日本に対する「言い表せない『自大(自惚れ)』と『自卑(劣等感)』の併存」¹⁰⁾に由来するものであり、それこそ今日まで中国人の日本に向けるまなごしの方向性に作用してきた意識構造の深層である。もとより、今日の中国人観光客にとっての「自卑」は必ずしも経済力等が日本に及ばないことに対して感じた負い目ではなく、それは、むしろ日本が同じ東洋国家として西洋化に成功しながらなおも自己のアイデンティティや伝統を保持することができたことに対して感じた口惜しさともいべきものであろう。その口惜しさが転じて負け惜しみとして増幅すればさらなる「自大」にもつながる。つまり、「自大」と「自卑」はいずれも敵だったり目標だったりする、日本という身近にいる他者を眼前にすればより強く刺激されるものである。両者は対立的に理解されるような異なる二つの状態ではなく、一つの連続の状態の両面として今日の中国人訪日観光客のまなごしにも伏在している。

6.3.2 「対等なまなごしの不在」

もとより、対等的なまなごしの不在はなにも一方的に中国側を責めるべきものではない。日本

人の優越感も阻害要因の一つであると孫歌が指摘する。これまでの論考でもわかるように、語彙のニュアンスに拘らずにいうと、日清戦争以来、このような「日本側の軽蔑／優越感 VS 中国側の自惚れ／自負／自大&自卑」の国民感情の重層的存在とせめぎあいは両国民衆のまなごしの交換空間を形成させるメカニズムの深層として機能し、「自他」を意識し確認する参照軸の移動に伴ってその構図をいよいよ複雑なものにしている。

竹内好が賞賛してやまない「三白眉」はいずれも日本を「知るべき他者」として位置づけ、対等な視点に基づきまなごすべきだと強く主張するものといえよう。しかし、これらの著作は決して今日の日本で一般読者に広く読まれ評価されたものではない。竹内好は戴季陶の『日本論』の解説文で「これが西洋人の書いたものですと、ずいぶんいい加減なものでも紹介されて評判になるのですが、中国人や朝鮮人の書いたものは、とかく軽んじられて、読書家に歓迎されないようです。」(p. 227)と指摘したが、残念ながら「西洋崇拜の気風は」昔も今も日本において一様に吹き荒んでいる。

「脱亜入欧」の一言に代表されるように、明治以来、日本人が気にしているのは「青い目」から向けられてきたまなごしである。一方、「黒い目」によるまなごしはどのような枠組みによって構築され、どのような視点転換があったのかは、凡そ関心の的ではない。近年急増した中国人観光客の「醜態」や「奇行」に向ける、「優越感」に満ちる日本のまなごしについて韓国出身のメディア研究者の黄盛彬(2017)は次のように批判している。

中国人観光客へのメディアの眼差しからうかがえる中国人に対する認識は経済効果を強調する報道においても、爆買というキーワードからもわかるように拝金主義に捕らわれた姿だった。ここには過去への羨望は存在しない、中華文明の先進世界に対する羨望も社会主義の平等を目指した理想への羨望もなく、むしろエコノミックアニマルと呼ばれた日本の過去、自分たちの醜い姿を振り返り、現在の日本の先進性を確認している。まさにこの他者への凝視を通して成し遂げられるのは、「私たち日本・日本人の優位性」であり、その視線の延長がインターネット空間まで拡張され、本音空間がバーチャルな空間にまで広がっていたのではないだろうか。(p. 273)

「嫌中本」「反中本」が山積みになっている日本の本屋の店頭状況と合わせてみれば、対等なまなごしの生成はまずこのような不対等なまなごしの交換空間を克服するところからスタートしなければならない。

6.4 テクストの新たな生産者に期待できるか

今日の中国においてネットを介在して映像音声も含む無数の日本関連のテキストが製造されているが、その解釈の仕方、すなわち日本を捉える枠組み自体には大きな変化が見られなかった。日本をめぐる中国人観光客の言説空間に改めて目を転じてみると、前述の愛国主義や消費主義的ま

まなごしに基づく、上辺だけをなぞる、通り一遍の記述や感想、いわゆる表層的な言説が満ち溢れている。それは、今日まで中国人識者によって生産された、「解釈的自己省察的な」まなごしに立脚する言説やテキストの貧弱さによる結果とも言えよう。前述のように、そもそも今日の状況は戦後から国交回復までの両国間の長い人的文化的交流の断絶による側面も大きい。中国民衆の日本についてのイメージを的確なものにするためには、時代に合わせて新しい知日家によるテキストの意図的再生産が必要不可欠である。しかし、20世紀80年代より中国から再び大量の留学生が日本にやってきたにもかかわらず、凡そ40年後の今日に至っても「三白眉」を上回る日本論や日本人論がついには誕生しなかった。

20世紀80年代後半から今日まで渡日した数十万人にも及ぶ中国人留学生の大群を厳安生の言葉を援用して表現すると、同じく「玉石混淆、千姿万態」の一言に尽きる。80年代後半から90年代初期にかけて大量に来日した「老（若くない）留／就学生」の多くはいわゆる「出稼ぎ組」であり、アルバイトに明け暮れ本国に送金し家族の生活向上を何よりの重責として自らに課していた。一方、90年代中期に入ると、高校卒業後すぐに渡日した「若い留学生」の割合が急増したが、そのうち、英米への留学が実現できず不本意ながらも比較的ビザの取りやすい日本留学に切り替え、勉強の中身よりもあくまで学歴取得を重視する「銀メッキ組」もあれば、ことさら先進国でのより良い生活を求め、日本で定職に就き日本社会の一員として生涯を終えようとする「安住組」もある。

学部の勉強を終えてなおも大学院に進学し、博士号などを取得し帰国した留日学生の一群、すなわち90年代以降の「勉強組」は、今日の中国における日本をめぐるテキスト・言説の生産回路において、疑いもなく中堅的な存在として目されている。そのうちのエリートの代表格とされる、北京日本学研究中心による国費派遣留学生の留日効果に考察を加えた李敏（2021）は、文化大革命、改革開放、計画経済から市場経済への移行など中国社会の激動の時代を生きるこの一群を、①社会全体、世界に目を向けるという大局観、②先進国日本に学ぶ強い意欲、③卓越した学力の持ち主とし、日中友好の時代に進学したため、日中両国から多大な教育資源が投入された結果、彼／彼女らは語学力、専門知識さらに研究のスキルのいずれにおいて他の留学生より優れていると評価している。修了者の大半が日中両国の大学、研究機関等に就職した実績を見れば、李の評価は頗る順当であろう。日本留学を通して彼／彼女らの多くは「等身大の日本像・日本人像の構築」、「研究方法の習得と客観的な視点の獲得」、さらに「個人中心の限定的なネットワークの構築」を留学の間接効果として得ており、帰国後も研究者として業績を積み日本関連の著作をも多数出版したと同研究によって報告されている。しかし、結果から見れば、その著作のほとんどはいわゆる堅実な学術的なもので、一般読者を念頭に書かれたものではない。大衆の知的好奇心を刺激し、真の日本社会・日本文化を伝え、日本に向ける一般中国人のまなごしにまで影響が与えられるものは残念ながらいまだに誕生していない。

この実に意味深い現象を取り上げ詳述する余地は本稿にはないが、戴季陶、周作人、蔣百里のいずれも帰国後、激動し錯綜する日中関係に身を置きながら知日家としての十数年ないし数十年

の知の蓄積を, それぞれの日本/日本人論に結晶させたという事実を見れば, いわゆる「自他」ともに認められる良質な日本論は何よりも「自他」構造の鮮明化/先鋭化を求めた彼の時代の要請に答えて産声をあげたものであり, その生命力の強弱はほかでもなく昨今の両国の政治経済社会文化の諸環境に大きく依存していると言えよう。我々が特に危惧すべきは「他者=敵」という愛国主義のまなごしの極端的な結晶は今日の大衆の視線の中に輝きを失ったというより, 平和といういかにも脆弱な衣替えのもとに潜り込み, 変容しながら伏在し続けていることである。その意味からいうと, 前出の胡漢民が言う「公平無私, 賄賂も受け付けず, 力による圧迫にも左右されない」「科学的批判精神」を涵養することこそ, 今日の複雑な内外状況の中で日中両国の識者にともに求められているものであろう。

一部の識者は, 目下の日中関係は「政冷経熱」から「政凍経暖文熱」(政治関係は凍るほど厳しく, 経済関係の熱さも冷めているが, 文化交流は熱い)へとシフトしているとの見方を示し, 接触仮説に基づき訪日観光による中国人の対日イメージの持続的改善にも期待をよせている。しかし, 日本人の対中イメージの改善のテンポが鈍く, 未だに8割を超える日本人が中国にマイナスの印象を抱いている現実を見れば¹¹⁾, 相互理解に歩み寄る点において同時性が欠如しており, まなごしの交換空間において構造転換を促す対等な視線は徹底的に不足している。

前出の孫歌は, 「日中両国の真の和解を妨げる中国人の自大と自卑, 及び日本人の優越感は明確なイデオロギー的な形をもって宣伝されるものではなく, 空気のようなデファクトスタンダードである」¹²⁾と指摘している。その上に, さらに一個の要素を追加するとしたら, それは百年前まで両国民の相互理解に機能していた補助線, すなわち漢文と中華文明に対する深い理解の喪失であろう。程度の差こそあれ, これは両国においてともに進んでいる現象である。西洋という第三者を共に注視するあまり, 互いの存在はかえって前よりわからなくなった。時代の流れに逆らえないとはいえ, ともに伝統を大事にすると標榜する両国にしてみれば, 実に残念で奇妙なことである。

注

- 1) これは司馬遼太郎が『街道をゆく 19 江南の道』で使用していた表現である。筆者が引用したのはKINDLE電子版(朝日新聞社 2012)であるため, ページ番号の抽出は困難である。本稿が引用したすべての電子書籍は引用文献リストに電子版と注釈するが, ページ番号は同様に省略する。
- 2) 本稿のいう「古層」は便宜上丸山真男の「古層論」から借用するものである。即ち中国人の日本に向けるまなごしの基底にあり続け, その枠組みの形成に影響を与えてきたものを意味する。
- 3) 戴季陶の『日本論』の日本語訳は戦前から戦後にかけて何種類も出版されている。最もよく知られているのは1972年に社会思想社によって出版され, 市川宏が翻訳し, 竹内好が「戴季陶の日本論」と題する解説文を付けたものである。本稿の竹内好についての引用はすべて同書からである。
- 4) これは民国の政治家・学者の陳啓天が自著『最近三十年中国教育史』(1930)で使っていた表現である。増田史郎亮(1970)が実藤恵秀の著作『近代日支文化論』(1941)を引用し, 「陳啓天は

- 『最近卅年中国教育史』で」としたが、『最近三十年中国教育史』が民国期の中国で太平洋書店によって出版された時、陳啓天は幼名の「陳翊林」を使用していた。
- 5) 張玉萍「戴季陶痛失朝鮮公主」『現代快報』2014年8月19日 <https://read01.com/zh-cn/RQqNGe.amp> 2021年8月2日閲覧
 - 6) 例えば1899年に日本に留学し、「再造共和の英雄」と称えられた蔡鍔（1882-1916）は、陸軍士官学校を次席で卒業した秀才の誉れの高い人物である。自国尊大の自意識をぬぐい切れなかったとはいえ、まともな留学生活を送っていたために、日本を見る目は「他より感情的要素が少なく透徹」していたと評されている（厳 p. 44）。蔡鍔は辛亥革命や護国戦争で大きな足跡を残したものの、1916年に35歳の若さで日本で病没したため、厳密に言えば日本と干戈を交えた反日家というより、むしろ日本の助力を得て革命大業を成し遂げたことで、親日派・知日派のまま生涯を閉じたと考えたほうが妥当であろう。彼が残した日本についての記述は体系的なものがなく、後世の中国人の対日観に与えた影響も少ないと考えざるを得ない。
 - 7) 本書は1972年に龍溪書舎が刊行した『日中問題 重要関係資料集』第一巻に収録されている。本稿が引用した部分は特別に注を付けたもの以外、すべて鈴鹿国際大学の細井和彦教授による日本語訳を参考したものである。詳細は細井和彦「蔣百里『日本人——外国人の研究』」（『鈴鹿国際大学紀要』12号2005.）を参照されたい。原文は『蔣百里全集』（北京工業大学 2015）や次のサイト等で確認できる。<http://www.bw40.net/9586.html> 2020年9月12日閲覧。
 - 8) 例えば第一次大戦後、「戦場で勝利し、宣伝で敗れた」とされるドイツにおいては、プロパガンダの重要性が認識され、1933年にナチ党が政権を握ると、第三帝国はルーデンドルフの『総力戦論』（1935）などに代表されるメディア研究を政策科学として推進した。それに伴い「報道は異なる手段をもって継続される戦争」という「宣伝戦」は日常化されていた。一方、第一次大戦後、同様に「総力戦」「思想戦」に着目した日本では、戦前の宣伝学の第一人者とされる小山栄三は1935年に出版した『新聞学』において、新聞の使命の一つとして「民衆の操縦法として宣伝煽動に用いられるところの『紙製の弾丸』である」と指摘していた。日独に長年留学した経験があり、両国の事情に通暁し軍事戦略家として高名な蔣百里はこのような「宣伝戦」、「思想戦」に注目し触発されるのは至極自然な流れであろう。
 - 9) 蔣百里の『国防論』は近年中国国内で再版を重ねてきたが、1937年の初版の一部（扉を含む）は次のサイトで閲覧することが可能である。<https://www.bookinlife.net/book-267504-viewpic.html#page=4> 2021年11月7日閲覧
 - 10) 孫歌「中国人対日本有説不出的自大和自卑」<https://cul.qq.com/a/20160329/049115.htm> 2020年9月12日閲覧
 - 11) 言論NPO「第15回日中共同世論調査結果」<https://www.genronpo.net/world/archives/7379.html> 2020年9月12日閲覧
 - 12) 前掲 孫歌「中国人対日本有説不出的自大和自卑」

引用・参考文献

- ジャン＝マリー・ドムナック. 『政治宣伝』. 小出峻訳. 白水社, 1957.
- ジョン・アーリ他. 『観光のまなごし』. 加太宏邦訳. 法政大学出版局, 2014.
- 宇野木洋. 「現在の視点から見た黄遵憲の日本認識」. 『立命館言語文化研究』, 第2号 (5. 6) [1991].
- 王錦貴. 「試論黄遵憲の『日本国志』」. 『図書情報知識』, 第4号 [1999].
- 王敏. 『中国人の日本観：国際日本学とは何か？——総合理解のための施策と実践』. 三和書籍, 2009. (電子版)
- 温穎. 「黄遵憲における明治日本観の転換——『日本雑事詩』の改訂をめぐって」. お茶の水大学研究

- 報告書, 2007.
- 桂島宣弘, 「華夷思想の解体と自他認識の変容」, 『岩波講座：近代の日本文化史 2』, 岩波書店, 2001.
- 姜明求他, 「韓国に対する旅客たちの地理理想と旅行体験」, 金成孜他編, 『東アジア観光学』, 亜紀書房, 2017.
- 許知遠, 「作為方法的日本」, 『創造日本：1853-1964』, 四川人民出版社, 2018. (電子版)
- 嚴安生, 『日本留学精神史——近代中国知識人の軌跡』, 岩波書店, 1991.
- 黃遵憲, 『日本雜事詩』, 実藤恵秀・豊田穰訳, 平凡社, 1968.
- , 『黄遵憲全集』, 中華書局, 2005.
- 小島晋治, 「中国人の日本観の変化——幕末・維新时期を中心に——」, 『日中文化論集』[神奈川大学人文学研究所], 2002.
- 古田島洋介, 「梁啓超『和文漢讀法』(盧本)簡注：復文を説いた日本語速習書」, 『明星大学研究紀』, 第16号 [2008].
- 蔡亦竹, 「悲劇的知日家, 經典的日本論」, 『日本論：一個外交家の日本風俗, 政治, 文化考』, 讀書共和國出版集團, 2019. (電子版)
- 嵯峨隆, 「国民革命期における戴季陶の対日観について」, 『法学研究』75巻第1号 [2002].
- 司馬遼太郎, 『街道を行く19 江南の道』, 朝日新聞社, 2012. (電子版)
- 周維宏, 「中国における日本社会研究について」, 『社会学雑誌』, 第17号 [2000].
- 周作人, 『日本談義集』, 本山英雄編訳, 平凡社, 2002.
- 祝曙光, 「從親日到仇日——近代中国人眼中的日本形象」, 『南京政治学院学報』, 第5号 [2015].
- 杉山文彦, 「清朝末期の中国人の日本観——日清戦争を中心に」, 『文明研究』第28号 [2011].
- 孫瑛鞠, 「清末中国知識人の近代日本認識」, 『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』, 第46号 [2018].
- 戴智軻, 「『真実』への『凝視』」, 『研究論叢』, 第94号 [2020].
- 戴季陶, 『日本論』, 市川宏訳, 社会思想社, 1972.
- 竹内好, 「戴季陶の『日本論』」, 戴季陶著『日本論』, 社会思想社, 1972.
- 張永芳, 「黃遵憲——不応被忘懷の歴史人物」, 『徳洲学院学報』, 第6月号 [2010].
- 趙德宇, 「中国の日本文化研究」, 『中国の日本研究』, p. 87. 科学技術振興機構中国総合研究交流センター, 2016.
- 張萍, 「他者之鏡——黄遵憲『日本雜事詩』中的日本形象」, 『国際漢学』, 第1号 [2010].
- 程天芹, 「『日本国志』版本及史料価値」, 『才智』, 第31号 [2011].
- 鄭海麟, 『黄遵憲与近代中国』, pp. 273-275. 三聯書店, 1988.
- 中島岳志, 「『戴季陶と近代日本』書評」, 『朝日新聞』, 2011年5月15日.
- 任達, 『新政革命与日本：中国 1898-1912』, p. 55. 商務(香港)印書館, 2015.
- 黃盛彬, 「本音と建前が交錯する中国人観光客へのまなごし」, 金成孜他編, 『東アジア観光学』, 亜紀書房, 2017.
- 増田史郎亮, 「清末, 中国人日本留学界の一側面」, 『長崎大学教育学部教育科学研究報告』, 17 [1970].
- 宮崎滔天, 「支那留学生について」, 『宮崎滔天全集』第4巻, p. 56. 平凡社, 1973.
- 望月敏弘, 「張玉萍著『戴季陶と近代日本』」, 『アジア研究』, 第75巻1号 [2011].
- 吉見俊哉編, 『一九三〇年代のメディアと身体』, 青弓社, 2002.
- 李海, 「梁啓超の『和文漢讀法』をめぐる日中批評史に関する一考察」, 『多元文化』, 第10号 [2010].
- 李景彬他, 『周作人評伝』, p. 56. 重慶出版社, 1996.
- 李建軍, 「迹迹東隣亦幻亦真——讀戴季陶『日本論』」, 『書屋』, 第7号 [2005].
- 李敏, 「90年代中国人留學生の日本留学の効果に関する研究」, 『大学論集(広島大学高等教育研究開発センター)』, 第53集 [2021].

